

# 京都看病婦学校とタルカット女史

渡 辺 久 雄

宣教師達の間で Emergency Evangelist of the Mission と呼ばれていたのがエライザ・タルカット女史であった。<sup>①</sup>神戸女学院の創立者であり、初代校長を務めた期間は、わずか五年間であったにも拘わらず、今なお多くの卒業生に慕われているのは、女史の崇高な人格にあると思われる。「仕えられるためではなく、仕えるためである」(マタイによる福音書第二〇章二八節)というキリストの言葉の実践者であったことは、困った人の居る所には、どこにでも出かけて行く人、即ち Emergency Evangelist と呼ばれていたことでもわかる。従って女史は一か所に長く留まることが少なく、さまざまな分野に進出し、しかも決して目立たぬよう心掛けながら、大きな功績を残した人であった。京都看病婦学校との関わりもその一つである。

明治も十年代に入ると、従来からあった漢方に代わって西洋医学が盛んに取り入れられ、病院の数も急増して明治十五年(一八八二)には、官公私立病院数は六二五に達した。<sup>②</sup>このため病人の世話をする看護人の必要性が急速に高まってきた。また看護人には男性よりも女性の方が、より適していることも医師や識者によって認められていた。こうした状況のもとで、わが国でも初めて女性の専門看護婦(Trained Nurse)が養成されることとなった。最初に開設さ

れたのが有志共立東京病院看護婦教育所（現在の慈恵医大と同系の慈恵会の設立―筆者註）で明治十七年（一八八四）のこと。次いで東京桜井女学校付属看護婦養成所（現在の女子学院と同系―筆者註）の明治十九年（一八八六）であった。つづいて明治二十年（一八八七）に京都看病婦学校が開設された。高橋政子『写真でみる日本近代看護の歴史』<sup>③</sup>では、同校の開設時期を明治十九年四月としているが、『同志社百年史』通史編一及び資料編一の中の日附が正しい。即ち京都看病婦学校は、同志社病院とともに明治二十年八月十一日付で京都府知事より認可され、同年十一月十五日開業式を挙げたのであった。ただし文中では前年の九月ごろから仮の場所において、病院業務と看護教育を正式の認可以前に行なったともとれる記載があるので、『写真でみる日本近代看護の歴史』の著者は、その日付を参考にしたのかもしれない。

さて、同志社が病院を経営し、看護婦養成所を開設する迄の経過は、同志社の開祖・新島 襄に負うところが大きい。即ちアメリカの留学から帰った新島は、在日宣教医のベリー博士（John C. Berry, M. D.）の協力により、同志社に医学部を設けることを計画した。「日本に強大なるキリスト教的 University を設立して、単にキリスト教の教役者を養成するのみならず、またキリスト教徒の医師―中略―を養成するは最も時宜に適したること」<sup>④</sup>と、一八七九年（明治十二年）二月にアメリカンボードに意見書を提出した。しかし新島の熱望にも拘わらず、資金調達が思うようにゆかず、医学部設置は中止となり、これに代わって同志社病院と付属の看護婦養成所（これを看病婦学校と呼んだ）の設立となった。

宣教医のベリー博士が一八八六年（明治十九年）九月に行なった、大日本私立衛生会京都支部会の集まりでの「京都看病婦学校設立の演説」<sup>⑤</sup>の中で、従来のやり方を看病旧法と呼び、これから行なわんとしている方法を看病新法として明確に区別した上で、細部にわたり具体的看病法を述べると共に、総看護婦長リチャーズ女史（Miss Melinda J.

Richards)の言葉を引用している。即ち「夜中の看病婦には其職分の時間中睡眠するを以て罪なりと教ゆるなり又た基督教を信ずる看病婦には其先導として彼の大教師(イエス・キリストの意味―筆者註)の完全なる模範あるが故に其志を高尚にす可きことを訓ゆ 是を以て貧しき病人と雖ども等しく是れ神の民なることを感じ 其為にする事は即ち神に仕ふる事と思ひて富者貧者の差別なく同様に患者を取扱ふものなり」と。

次に『京都看病婦学校々則一覽』の中から、現在と比較して興味深い幾つかの事項を引用してみたい。まず入学者の年齢について「入学者ノ年齢ハ三十年乃至四十年ヲ以テ最好トス」<sup>⑤</sup>とある。この頃、産婆と呼ばれる女性唯一の専門職の人びとの年齢が高かったことから、看護婦にもそれを適用したものであらう。また生徒入学試験科目について「一、聖書ノ文義(文意のこと―筆者註)ヲ了解シ得ヘキ事 二、通用スル丈ケニ文字ヲ書キ得ヘキ事 三、事物ヲ觀察スル敏捷精密ナル事」とあり、続いて「一、生徒修学ノ期限ハ一ケ年六ケ月トス 一、束脩(教師への贈物の意であるが、現在の入学金に当たろう―筆者註)并ニ月謝ハ之ヲ要セズ―後略」<sup>⑥</sup>とある。

さて、入学試験科目について、聖書が読めるか否かを基準にしているのは、この学校の設立主旨がうかがわれる。また「事物ヲ觀察スル敏捷精密ナル事」は現在でも大切な条件である。医師を助け、その手足となって活動するためには、最大の注意力、適切な判断力、冷静かつ敏捷な行動力が要求されているからである。

当時の生徒はすべて同志社病院構内の一部に起居していたので、また舎則が定められていた。即ち

- 「一 生徒ハ病院構内ノ校舎ニ起臥シ且病室ニ於テハ見習ノ為メ看病ノコトニ従事スベシ
- 一 生徒ハ節制、忠実、静穩、嚴肅、清潔、忍耐、深切、機敏、快活ナランコトヲ要ス
- 一 生徒ハ病室ニ在テ其職ニ従事スル間ハ袖附ノ前懸、及ヒ塵<sup>チリ</sup>徐<sup>ス</sup>ケノ帽ヲ用ユベシ此服ハ病院ヨリ給与スベシ、其  
他ノ衣服ハ生徒ノ自弁タルベシ

前上ノ規則ヲ遵奉シ全科ヲ卒業シタル生徒ニハ其学識及ヒ才能ヲ保証スヘキ卒業証書ヲ授与スベシ

但シ生徒卒業後、勤勞ノ場所ヲ択フコトハ各自ノ勝手ニシテ或ハ慈善ノ事業ニ或ハ公私ノ病院ニ或ハ通常ノ家ニ於テ有益ノ施術ヲ為シ得ベシ」

以上の引用は明治十九年の「京都看護婦学校設立趣旨」によつたが、實際に開校してみると不都合な点もあつたようである。例えば入学者年齢の場合、最初は三〇〜四〇歳としたが、後には甲種（二二歳以上）、乙種（二五歳以上）の二種類に改めている。その後、さらに満二二歳以上と一本化している。また学力についても、従来ノ条件の他に「書取の出来得るもの」、「加減乗除の出来得るもの」が追加され、授業料については最初は徴収せず、食費のみを納めていたが、寄宿生と通学生の二種の生徒の出現で、通学生に限って徴収するに至つた。

看護婦の服装に關して、制服（看護婦服）は病院側より支給した。それがどのようなものであつたかについて、最初の総看護婦長リチャーズ女史の自伝によると「アメリカでふつうに見られる青い縞のギンガムのワンピースに、胸当てつきのエプロンと白のモスリンのキャップである。校長である私が、生まれてはじめて服づくりに挑戦し、自分の手で裁断し縫つたのであつた。わらざうりはアメリカの靴より安くて音がしないし楽なのでそのまま使ってもらふことにした。」<sup>⑤</sup>と言つてゐる。当時の制服を復元して人形に着せてみたものが本誌の口絵写真である。

次に、後日タルカット女史と関わり合ひを持つことになる看護婦学校におけるキリスト教教育について眺めてみたい。この点、『京都同志社病院規則』（英文・邦文）<sup>⑥</sup>一八八七年（明治二十年）六月の中に「伝道師」（Evangelist）の項があり、その職務事項が述べられている。

「第一項 伝道師ノ第一ノ職務ハ患者ニ実意ヲ尽ス可シ 伝道師ハ毎朝夕ニ祈禱ヲ行フベシ 日曜ノ朝ハ祈禱ヲ止ムルコトアレドモ同日十時ニハ説教ヲナス

第二項 医員及ビ保母ノ禁止セザル限リハ患者ノ意ニ随ヒ適宜ノ時間ヲ撰ンデ病室内ニ於テ宗教上ノ談話ヲナスコトアルベシ

第三項 患者ヨリ依頼スルトキハ患者ノ親戚朋友ヘ書面ヲ認ムルコトアル可シ 此外患者ヨリ何事ニテモ依頼スルトアルトキハ保母ノ指令ニヨリ之ヲ取計フ可シ

第四項 患者危篤ノ症状ヲ発スルトキハ其親戚ニ通知スベシ

第五項 毎朝ノ祈禱ハ日曜日、水曜日、金曜日ハ午前第八時三十分ヨリ外来患者診察所ニ於テ之ヲ行フベシ

第六項 外来患者診察中患者溜ノ間ニ於テ真道談話ノ聴聞ヲ欲スル者ヘハ之ニ静ニ談話スベシ 亦之ニ関スル小冊子類ヲ与ヘテ可ナリ

第七項 外来患者診察中ハ患者ノ病症ニ随ヒ書符ヲ与ヘテ内科病者外科病者等各其局ニ送ル可シ

第八項 治療ヲ受ントスル新患者ノ姓名、住所、年齢ヲ記載スベシ

以上が病院に於ける伝道師の職務に関する規定であるが、筆者の主題は同志社病院や看病婦学校自体にあるのではなく、あく迄もタルカット女史の病院や学校に於ける活動にあることは言う迄もない。それについても女史が、どういう理由で病院や看病婦学校で奉仕するようになったのかの経緯を述べる必要がある。この目的から、今少しく病院の内情、特に *Missionary Nurse* の資格で来日した最初の総看護婦長リチャーズ女史の活動から眺めてみることにする。

リチャーズ女史は既に本国のアメリカでも管理職の経験を持ち、また優秀な看護婦として高名であったのを、同志社病院がえてて招聘したのであった。<sup>⑩</sup> また女史はアメリカンボードより宣教看護婦の資格を認められ、日本派遣の任命を受けて一八八六年（明治十九年）一月神戸に到着した。<sup>⑪</sup> しかし同志社病院に赴任したのは同年九月であった。同女

京都看病婦学校スタッフ在校期間表（斜線の分）

M.	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
Dr. John C. Berry 1886.2. (M.19) -1893.11. (M.26)											
Miss Melinda J. Richards 1886.1. (M.19) -1890.6. (M.23)											
Miss Ida V. Smith 1888.12. (M.21) -1889.9. (M.22) 1889.10. (M.22) -1890.8. (M.23) 1890.9. (M.23) -1891.7. (M.24)											
Miss Helen E. Fraser 1891.9. (M.24) -1896.7. (M.29)											
Miss Eliza Talcott 1886. (M.19) -1890. (M.23) 1890. (M.23) -1894.6. (M.27) 1894.7. (M.27) -1896.2. (M.29) 1896.2. (M.29) -1902.12. (M.35)											

史が看病婦学校で看護学を教えたことは言う迄もないが、同時に日本に於ける伝道に大きな関心を抱いていた。「私は本来宣教師として日本に行くように任命されたのであって、私の看護学校の仕事のほかに、またその仕事と関連して、厳密な伝道活動をするようになっていた。」とも述べている。

しかし新島 襄やベリー博士らは彼女が看護婦達の総監督者、病院の総婦長 (Superintendent of Nurse and Hospital Matron) であることを期待して招聘したのであった。従って必ずしも伝道者として招聘したわけではなかった。それにも拘わらずリチャーズ女史は伝道に熱心であった。彼女の思い出の記の中に「二年目（一八八七年―筆者註）の初めころからちようど言葉にも人にも慣れてきたので、私は通訳の助けを借りて日曜学校活動を始めた。私は隣接する町々へ毎週出向いて説教をしたり、婦人たちにバイ

ブル・クラスを開くように頼まれた。この非常に興味深い仕事を、私は日本滞在中ずっと続けた。」とある。<sup>②</sup>

こうした情勢から、病院側はもう一人、看護婦指導者を求めることとなり、一八八八年（明治二十一年）にスミス女史（Miss Ida V. Smith）の来校となったのである。しかし両女史の間の人間関係はうまくゆかなかったようであり、このスミス女史も一八八九年（明治二十二年）より一八九〇年（明治二十三年）の期間、新潟に伝道に出かけ、一八九〇年の九月から再び看病婦学校に戻ったが、彼女自身も健康を害し、病院側には好印象を与えぬままに、一八九一年（明治二十四年）七月に京都を離れてアメリカに帰国した。このように京都看病婦学校に於いて二人の女史の出入りが行なわれているころ、タルカッタ女史は岡山に活動の根拠地を置き、岡山県下の伝道から更に足を伸ばして鳥取伝道に奔走していた。この事は『学院史料』第六号に記したところである。

タルカッタ女史の生涯の中で一つの美談として、明治二十七、八年の日清戦争中に、しばしば広島陸軍予備病院を訪問し、国境を越えた傷病兵慰問や看護によって「日本のナイチンゲール」と称えられた話<sup>③</sup>が有名であるが、こうした医療の手伝いや看護活動は、女史が京都看病婦学校で活躍した数年間の体験が大きく働いていたとみるべきであろう。もちろん若い時代に、故郷で病める伯母の看護を多年行なってきたことも、こうした看護活動を促した一因であろう。もう一つ考えられることはベリー博士との友情関係である。ベリー博士はタルカッタ女史にくらべて一〇歳年下である。タルカッタ女史が一八八〇年（明治十三年）神戸の地を離れて岡山伝道区に赴いた折には、ベリー博士の邸宅に起居を共にしながら地方伝道に励んでいるので、このときにもタルカッタ女史は医療活動に関する知識を多く得たにちがいない。またこのとき、両者の間に伝道者としての確固とした信頼の絆が結ばれ、活動の分野は異なるにしても、日本に於ける伝道の熱意は共通して燃え上がったことであろう。ときにタルカッタ女史が四四歳、ベリー博士が三四歳であった。

タルカット女史が岡山入りをした同じ年の二月、京都の新島 襄が岡山にベリー博士を訪ねて、同志社医学校や付属病院設立の構想を述べたようである。<sup>⑤</sup>そしてこれ以後、二人の間の遣り取りが続くのであるが、この計画の中心が医者であるベリー博士であったことは言う迄もない。特に病院に付属して看護婦養成機関を設ける考えはベリー博士の発案であったと言われる。<sup>⑥</sup>

新島とベリー博士の間の話が一八八〇年（明治十三年）に始まっているにも拘わらず、病院や学校の開設が一八八七年（明治二十年）となったことは、京都に於ける敷地の入手、資金の捻出、スタッフの人選、認可申請等の問題があったことにもよるが、大きな理由の一つはベリー博士側にあった。即ちベリー博士が岡山県との間に結んだ雇用契約、即ち岡山の医学校での講義・指導と病院の診療の期限が未だ満期に達していなかったことによる。従ってベリー博士が京都に移るのは一八八六年（明治十九年）迄待たねばならなかった。

京都看護婦学校は一八八七年（明治二十年）にやっと本格的な運営が始まり、ベリー博士と総看護婦長のリチャーズ女史とのコンビで病院と学校が順調な滑り出しをみた。しかし前述したように、リチャーズ女史は優れた看護婦指導者であったが、また伝道にも極めて強い関心を持っていた。学校に於ける若い看護婦の指導のほかに、地域に於ける婦人伝道に熱心であった。このため、もう一人の看護婦指導者のスミス女史を招いたことは先述した通りである。しかし二女史とも個性の強い婦人であつたらしく、ベリー博士も、スミス女史は最善をつくして看護教育につとめているが、自制心に欠けているとみていた。<sup>⑦</sup>この点についてはタルカット女史も、看病婦学校のスタッフになった翌年の一八九一年（明治二十四年）のクラーク博士宛の書簡の中で次のような見解を示している。

「ご承知の通り、スミス女史は自分の仕事に熱心ですし……（不明）……肉体も強健です。ここで彼女が占めている地位についても多くの点でうまくいっているように思われます。問題の自制心については、京都に来てから確かに身



に着けましたが、彼女のその方面での理想がそれ程高いとは思いません。彼女という見本が、周囲の人びとの上に、どの位災いをもたらしているか御自分では認識していच्छやらないと私は確信しています。災いは全く潜在的ですが、彼女は御覧のような才能の持主ですから。私が京都に來た時に望みました点は、彼女がこの地に留まって、その來日の目的であつた仕事果せるよう、私が助け手となることでした。しかしその成果をあげられないことは痛恨の極みです。私は彼女の特異性について論議することはスミス女史に対して不誠実であると思つてきました。さらに、伝道の仕事を諦めるよう彼女に示唆することの可否を、手まわしよく考えねばならないという思いは、私にとり辛いことでした。しかし、もしその事が神様のご意志であるなら、このたびも神様は彼女と私達に力を示して下さると信じて私はお祈りをしているところです。——中略——この秋、仕事を始めるためにも、当地で人を得られないとすれば、学校にとつて致命的な失敗となりましよう。」<sup>②</sup>と言ひ、スミス女史をかばいながらも、大局的見地から、その辞任の後任補充が一刻もゆるがせにできない点を本部のクラーク博士に訴えている。この書簡はタルカッタ女史が京都看病婦学校付宣教師として、直接關係して一年後の一八九一年（明治二十四年）の発信であり、スミス女史が歸米する直前に當たる。

『ライフ・アンド・ライト』誌の一八九〇年（明治二十三年）十月号には京都在住の宣教師名としてリチャーズ女史、スミス女史、タルカッタ女史が出てゐるが、リチャーズ女史は、この年六月に既に歸国してゐた。同じく『L』誌一八九一年（明治二十四年）十月号には、ペリー博士の長文の報告が掲載されており、その中で「我々は、仕事の福祉面に關して示された伝道団の強いご同情に深く感謝しています。とりわけ今回大変優れた助け手のタルカッタ女史を当地に送つて下さつたことに對し、厚く感謝しています。」<sup>③</sup>と言つて、京都看病婦学校にタルカッタ女史が応援に駆けつけたことが、ペリー博士にとりいかに心強いものであつたかを物語っている。また一方で「先の報告で申したような、

リチャーズ女史の引続く不健康は、とうとう彼女をして、その職場からの離脱を余儀なくせました。またスミス女史の方は学年の初めから総看護婦長の勤めに励んでいます。看護学の教師としても、総看護婦長としても、彼女は病院の中で能率良く仕事をしています。彼女は自分のノートの中に『私は学校の中で、すべての看護婦を誇りに思っています。もちろん看護婦の中には他の者より大きな才能を持っている者もいるでしょうが、医師が信頼できるような実際の知識は、すべての生徒が持っていると思います。病人にとっては気転のきくことと明朗な心とが大切であり、病人から信頼され尊敬を集めるような女性らしい性格が必要です』と記しているのです。」と二人の総看護婦長のことを報告している。

一八九九年（明治二十二年）から一八九〇年（明治二十三年）は看病婦学校にとってリチャーズ、スミス両女史の出入りがあって多難の年であった。従ってタルカッタ女史の来援が実現したのである。また時を同じくして、タルカッタ女史が切望していた新しい総看護婦長のフレージャー女史（Miss Helen E. Fraser）が一八九一年（明治二十四年）に着任した。一八九二年（明治二十五年）に出された『第六回同志社ミッション病院・看病婦学校年次報告』<sup>④</sup>によると、病院及び看病婦学校のスタッフとして、病院長兼外科医としてジョン・C・ベリー博士、内科・産婦人科医としてサラ・C・バックレー博士（Mrs. Sara C. Buckley, M. D.）、宣教師としてエライザ・タルカッタ女史、総看護婦長兼病院婦長としてヘレン・E・フレージャー女史、聖書教師として不破夫人、通訳として成瀬四壽嬢などの名が出ている。この成瀬四壽は神戸女学院普通科第七回の卒業生で、後に結婚して百崎夫人<sup>ももざき</sup>となった人である。

一八九四年（明治二十七年）のLL誌十二月号<sup>⑤</sup>には、明治二十七年の看病婦学校卒業記念写真を掲げているが、卒業生達の後列のタルカッタ女史、フレージャー女史をはじめ、当時のスタッフを紹介した後に、「学校が一八八七年に創設されて以来、既に五四名の卒業生を送り出してきた。その中のある者は結婚したが、多くの者は病院勤務と個人看護

で国内各地に於いてそれぞれに伝道をしている。看護婦達はいずれも卒業迄にクリスチャンに成っている。この学校が設立されて以後、幾つかのほかの看護婦学校が日本に設けられたが、今日では本校の卒業生が全国中で看護婦として最高の地位にある。一八九一年の大地震(明治二十四年の濃尾大地震―筆者註)の折、病院は内科及び外科的救助を通して輝かしい功績をあげた。また最近では朝鮮戦争(日清戦争を指す―筆者註)で傷ついた日本将兵の看護のため、一〇名の特志看護婦を派遣したことに對して、京都府知事と市民より感謝を受けた。その時は政府の配置による看護婦達で十分であったが、最近さらに四人の看護婦の要請があった。」とベリー博士は記している。

さて、従来から良く知られているタルカット女史の広島陸軍予備病院での医療援助や、「日本のナイチンゲール」と称えられた奉仕活動の背景には、京都看護婦学校スタッフとしての使命感があったと思われる。なお、昭和十一年十月七日発行の佐伯理一郎博士の著書『京都看護婦学校五十年史』<sup>⑤</sup>の明治二十七年年度の記事の中に「此年七月、本邦清国と開戦し、広島に陸軍予備病院を設けらる。依て本校よりも卒業生五名・生徒二名を十月某日を以て該地に派遣し、予備病院に従事せしむ。教師ミス・トーカーも数月の後、彼地に赴き、専ら予備病院の患者を慰問せらるることとなり。」<sup>④</sup>とあって、タルカット女史が看護婦学校の教師としての資格で活躍したことがわかる。

この京都看護婦学校は、母体とも言うべき同志社の内紛、明治二十三年の教育勅語發布を契機としたキリスト教教育機関への国の圧迫等により、アメリカンボードの支持もなくなり、廃校か独立経営かの選択に追い込まれた。結果に於いて、一九〇六年(明治三十九年)法人組織による独立した学校となって戦前迄継続して運営された。<sup>⑥</sup>

また、前掲書の明治三十六年十月十三日の項に「ミス・トーカーを招き同窓会を開く、本校の永く維持せられんことを祈りてなり」<sup>⑦</sup>とあり、明治四十四年の項には「十一月下旬、本校の恩師ミス・トーカー(七〇歳)神戸にて永眠せらる。一生涯を神に捧げて伝道に尽くされ、人を憐むの心最も深く、病中も諸方よりの見舞に花を貰はれたるが、自

分の枕頭には置かで、之を彼処の病人に送ってよ、あれは此処の病人に進ぜよと、明日をも知らぬ重態の中にも尚知る人々の病人の姓名を一々記憶して送られた。実に我々の手本とすべきあかしの人であった。」と記録してタルカト女史の人格を称えている。

本稿は神戸女学院創立者（タルカト女史）記念日（五月二十二日）の講演として、昭和六十三年五月二十七日、中高部及び大学の礼拝時に行なった話の内容を増補したものである。

資料集めの段階で、明和看護専門学校の先生方、同志社社史資料室長、同志社大学図書館の係員の方々にお世話になったことに対して厚く御礼を申し上げたい。また今回も諸文献の増補、原稿の編集、印刷校正に当たって史料室の若山晴子助手、石村真紀職員、栗木順子夫人の手を煩わした。文末ではあるが深く感謝の意を表したい。

# 註

- ① *Mission News of the A. B. C. F. M. in Japan Mission*, Vol. 15, No. 3, Dec. 1911, "Talcott Memorial Number", P. 49.
- ② 高橋政子『写真でみる日本近代看護の歴史』医学書院、一九八四年、二頁。
- ③ 前掲書、一四頁。
- ④ 学校法人同志社編『同志社百年史』通史編一、一九七九年、二八八頁。（以降本書の引用に当たっては『通史一』と略記。）
- ⑤ 学校法人同志社編『同志社百年史』資料編一、一九七九年、四〇四～四〇七頁。（以降本書の引用に当たっては『資料一』と略記。）
- ⑥ 『通史一』、二八九～二九〇頁。

- ⑦ 『資料一』、三九三―三九九頁。
- ⑧ 前掲書、四〇二頁。
- ⑧ 前掲書、四〇三頁。
- ⑩ 前掲書、三九九―四〇四頁。
- ⑪ 前掲書、四一四頁。
- ⑫ 前掲書、四二三頁。
- ⑬ 同前。
- ⑭ 前掲書、四二八頁。
- ⑮ 『通史一』、三〇三頁。
- ⑯ 学校法人同志社編『同志社百年史』資料編二、一九七九年、一九五―二二三頁。（以降本書の引用に当たっては『資料二』と略記。）このうち「Evangelist」に関するところは一九九―二〇〇頁。
- ⑰ 『資料一』、四三二―四四三頁。このうち、「伝道師」に関する項は四三四―四三五頁。
- ⑱ 『通史一』、二九六頁、三〇四頁。『資料一』、四〇〇頁。
- ⑲ 『通史一』、二九六頁。
- ⑳ 前掲書、二九九頁。
- ㉑ 前掲書、三〇四頁。
- ㉒ 前掲書、三一二頁。
- ㉓ 神戸女学院史料室『学院史料』第六号、一九八八年、一一二頁。
- ㉔ Rev. H. Loomis: *A Missionary Lady Among the Japanese and Chinese Soldiers*, Yokohama, Seishi Bunsha, 1895, P. 2
- ㉕ 『通史一』、二八九頁。
- ㉖ 前掲書、二九二頁。
- ㉗ 前掲書、三一二頁。
- ㉘ タルカット書簡三五号、一八九一年六月三日福井発―「米国伝道会宣教師文書、一八九一―一八九九」。
- ㉙ *Life and Light for Woman*. Oct., 1890, P. 445. （以降本書の引用に当たってはしし誌と略記。）

③⑩ 前掲書、一八九一年十月号、四五四—四五七頁。  
③⑪ 『資料二』、二一三頁。

③⑫ LL誌、一八九四年十二月号、五六八頁。

③⑬ 佐伯理一郎『京都看病婦学校五十年史』、京都市上京区室町通中長者町角、京都看病婦学校同窓会代表 佐伯理一郎発行、昭和十一年。

③⑭ 前掲書、二九頁。

③⑮ 『通史一』、三一四—三一八頁。

③⑯ 佐伯、前掲書、三八頁。

③⑰ 前掲書、五八頁。